

F・シュヴァリエ著

## 『植民地時代のメキシコにおける土地と社会—巨大なアシエンダ』

François Chevalier, *Land and Society in Colonial Mexico, the Great Hacienda*, translated by Alvin Eutis, University of California Press, 1963, ix+334 p.

## I

著者のシュヴァリエはメキシコ市のフランス-ラテン・アメリカ協会 (Institut Français d'Amérique Latine) の創立者であり、現在ボルドー大学イスパニア研究所 (Institut des Études Hispanique) の所長である。本書は三つの部分から構成されており、第1部「環境」では地理的環境ならびにインディオの土地所有と社会組織の概観、征服者の手による最初の農業の展開、牧畜の急速な発達、第2部「最初の土地の主人」では、中部および南部メキシコにおける土地所有の形成、北部における牧畜業者・鉱山業者の進出、そして大土地所有に対抗するものとしてのインディオ、あるいは中小規模の白人の村落、第3部「定着化の傾向」では教会の土地所有とアシエンダの形成について述べられている。

## II

征服期におけるメキシコでは、中央高地のアステカの勢力下およびその他土着民が高文明に達していたところでは人口稠密で集約的な農耕が行なわれていた。そこでの基本的な土地所有形態はカルプリ (Calpulli) という共同体による土地所有であったが、一方マイエクス (Mayeques) という農奴に耕作させる貴族の土地所有も出現していた。それらはいずれもアステカの首長に対して貢物を納めた。

新大陸に最初に渡来した征服者たちは、土地の耕作にはほとんど関心を示さず、かれらの唯一の収入源はインディオからの貢物であった。しかしかれらが土着の穀物であるトウモロコシを食うことで満足できないかぎり自ら穀物を生産することが必要であった。このような状況が、かれらに土地への関心を起こさせた。征服に参加した兵士たちに対する土地の割当てはペオニア (peonia) とカバイエリーア (caballeria) の2種類あり、

前者は歩兵に対するもので40~50ヘクタール、後者は騎兵に対するもので前者の約5倍の面積を占めた。中央高地では肥沃な水利のよい土地でインディオの労働力を利用して小麦の生産が行なわれた。その農耕は牛や農機具を欠き、土着のトウモロコシ栽培と同じ方法で行なわれた。中央高地の Puebla—Atlixco 地域が16世紀におけるメキシコの農業の中心地となった。しかしながら当時の農民はきわめて不安定な性格のもので、不作の年や労働力が不足するとすぐに耕作を放棄して他の仕事に移ってしまうので、副王は常に農民を激励して小麦の生産を続けさせるように努めた。またインディオの奴隷化が禁止されたため労働力を確保するためのさまざまな方策が考えだされた。当時耕作に従事することは卑しい仕事と考えられ、スペイン人が自らこれを行なうことは決してなかった。

一方熱帯および亜熱帯に相当する地域では、スペイン人によって栽培された最も重要な作物は砂糖キビであった。資本投下の少ない小麦に比して、砂糖キビははじめからアンティエユ (Antilles) 列島におけると同様巨大な半農・半工業の企業であって、数百人のインディオあるいはニグロの労働者を雇用した。精錬所は水車によって動くインヘニオ (ingenio) と牛あるいはラパによるトラピチュ (trapiche) の2種類あった。こうした砂糖キビ農園は原住民の社会にはまったくみられなかった新しいタイプのコミュニティーを形成する。これが16世紀において後の典型的なアシエンダに先行する最初の大規模な農園である。しかし17世紀にいたるまでは上記の耕作に供される土地は、全国土のうちの限られた小部分にすぎない。

## III

牧畜の仕事は農耕と異なり白人にとって卑しいものとはされなかった。征服後の10~20年に豚、羊に次いで牛が中央高地で非常な勢いで増加しはじめた。牛の大群がこの地方のインディオのトウモロコシ畑を破壊するという現象が起こる。そこで副王の政策としてこの牛群を人口の少ない北部へ移動させることとなった。牛の大群は満潮のような勢いで北部の平原と海岸の草原地帯へ広がった。牛と羊に次いで馬も急速に増え、スペイン人、メスティーソならば最も貧しい者でも自分の馬を所有するほどになった。またこの時期にスペイン人牧畜業者たちが、危険な遊牧民の生活舞台であった北部へ浸透していった。かれらがこの地方で鉱山を発見することになる。

中央部および南部では16世紀の末までに畜群の増加は止み、17世紀には牛の数はほぼ固定化した。これらおよびただし数の牛や羊の用途は、食肉と皮革および羊毛であった。その結果として牧牛、牧羊エスタシアの経済は外に向かったものであった。すなわちメキシコ、プエブラ両市周辺の織物業者に、あるいは新大陸の皮の大消費者であるヨーロッパに依存するものであった。これは後の典型的なアシエンダの経済が半自給自足性によって特徴づけられるのと対照的である。

## IV

征服の際功勞のあった者に対して与えられた土地はエンコミエンダ (encomienda) であった。これはエンコメンダール (encomendar: 受託する) という言葉からでているように、エンコメンデーロ (encomendero) すなわちエンコミエンダ所有者は一定の土地とそこに住むインディオを受託され、インディオから労働力および貢物を徴収し、その土地の開発に努めるいわば開発権所有者であった。エンコミエンダの大きさは概して巨大なものであった。16世紀にこの国で最も安定した収入を得た者はエンコメンデーロと北部鉱山業者の一部、それに高級官僚であった。エンコメンデーロはしだいにこれら受託された土地を私有地化し、インディオを奴隷的に酷使する傾向があった。かれらの利害と国王、官僚、教会の利害とが対立するようになり、後者はエンコミエンダを制限する数々の試みを行ない、国王はエンコメンデーロの死に際して多くのエンコミエンダを没収した。しかしながら土地の小数の富者への集中の傾向はいつそうはなはだしくなった。

北部は中央の權威の及ばぬ地方であり、巨大な銀山の所有者や牧畜業者は独自の軍勢力を有する半独立の勢力をもっていた。そこでの経済は外部に対して開かれたものであり、比較的活発な商業活動が存在した。これは後の典型的なアシエンダの経済と、かなり異なるものであった。

17世紀において国王は、すでに時代遅れとなった欠陥の多い土地受託の制度を改め、これらの土地所有者に対して特別な税を課すことと引き換えに、それまでの単なる用益権と異なるはっきりした土地所有権を認めた。これによってアシエンダが法的な基礎をもったものとして登場する。このような大土地所有がアシエンダへと発展をしていった時期に、銀のブームは去って鉱山は半ば閉塞された状態となった。商業は事実上停止に等しく、

地方の生活はアシエンダを中心に営まれるようになる。

しかしながらアシエンダはこの時期においてもメキシコにおける唯一の土地所有形態ではなかった。インディオの共同体も依然狭少ながら土地を所有して存在を続けた。インディオを大土地所有者の搾取から保護し教化しようとするジェスイット団の活動もアシエンダに対抗する力として存在した。インディオの共同体とならんでクレオール (creol: 新大陸生まれのスペイン人) 農民の自由村も大土地所有に対抗するものであった。これらの自由村のいくつかはその後アシエンダに併呑される。インディオ共同体の土地も多くアシエンダの蚕食を受け、土地を失った村人たちは近くのアシエンダへ雇われて生計費を補わねばならない運命に陥った。

## V

17世紀におけるアシエンダの到来は、それと相まった社会構造の発達を伴った。初期のアシエンダ所有者にとっては土地所有の権利よりも労働力の供給が死活を制する重要な問題であった。16世紀以来国王は常に大土地所有者に対するインディオの労働力提供を減少させる方向へもっていった。土地所有者はその埋合せをするのに腐心した。ニグロの奴隷は高くつき、また数も少なかった。そこで考えだされたのがペオナーへ (peonaje) という債務による農奴制度であった。インディオ労働者は金を前貸しされ、それを一時に使ってしまい返済することが不可能となるのでその債務によって土地に結びつけられるという結果になる。これらの土地に縛られた農奴をペオン (peon) と呼ぶ。ペオンは地代を払わずにアシエンダの土地で働き、主人から衣服、医療その他の世話を受けるということで債務は増すばかりであり、永久に土地に縛りつけられることになった。アセシエンダ (hacendado: アシエンダ所有者) たちはインディオ労働者の従順さを十分に利用した。この一方的な債務の制度に加えてアセシエンダたちはもう一つの労働力調達の方法をもっていた。すなわちインディオの土地を奪い、かれらをしてアシエンダに雇われるか小作人として働くことを余儀なくさせるものであった。

17世紀はアシエンダがはっきりした土地所有権を獲得し、ペオナーへの制度を確立したばかりでなく、それが半独立の経済単位に成長したことで注目される。それは事実上アセシエンダあるいはアセシエンダの委任を受けて直接監督、経営にあたったマヨルドーモ (mayordomo) によって統治される一つの新しい形態の地域社会

である。北部においては資源が乏しく、広大な領域に点在するアシエンダは発端から可能なかぎり自給性を求める一つのマイクロコスモスとしての形態をとった。通常アシエンダは灌漑組織、薪炭用の森林、製粉所、熔鉱炉さらに牛、羊などの畜群を含む混合型アシエンダ (mixed hacienda) へと発達した。人口稠密で豊かな地域にある砂糖農園も同様の特徴を有するようになった。灌漑のゆきとどいた砂糖キビ畑に加えて家畜のための牧草地があり、牛や羊はインディオやニグロの労働者のために肉、皮、羊毛を提共した。同時にトウモロコシ畑、森林もそこに含まれた。銀の生産の激減はアシエンダの経済構造をいっそう閉塞的なものとした。アシエンダには教会、学校、病院、店舗等地域社会として必要なものはほとんど備わっていた。17世紀にはこのアシエンダの経済がメキシコ経済のあらゆる部門に浸透するにおよび、アセンドはクレオールおよびスペイン人社会の規範的なタイプとなった。この時期に土地所有階級としての貴族階級が出現したものと考えられる。アシエンダの真の所有者は個人であるよりもむしろ家族あるいは一族といったほうが正しく、それは家柄と不可分に結びついたもので、土地は自由に処分したり分割したりできないものであった。アセンドのアシエンダに対する関心は有効な生産を行なって利潤をあげることよりも、土地所有者であることに伴う社会的地位、威信に関するものであった。

## VI

アシエンダはメキシコのみならずラテン・アメリカ諸国の過去において、一部の国については現在もなお、最も重要な社会、経済上のインパクトをなしたものであり、その研究はラテン・アメリカの社会史、経済史を理解するうえに欠かせぬ要因であるが、文書に残された記録は少なく、その実態を最も把握しにくいことがらの一つである。本書で著者はスペイン人がメキシコを征服して以後いかにしてこの地に植民し、17世紀にはアシエンダを中心とした自己完結的な生活単位を築くにいたったかを歴史的に観察し記述するという困難な骨の折れる仕事を行なっている。この時期のメキシコの土地と社会の問題を扱った総括的な研究は他にほとんどみられないので、本書はメキシコ研究者にとっては有用な文献といえる。次に本書の特徴と考えられるものをいくつかあげれば、まずメキシコの土地や社会制度の問題を扱った他の研究では大土地所有制、インディオ共同体、自由村といった範疇概念からまず出発し、おのおのの組織や特徴を研究

するという態度がとられているのが普通であるが、著者は土地所有者という主体に焦点をあてて、かれらがいかにして土地を獲得し中央の権力から半ば独立した大土地所有を確立していったかを克明に追っている。国家権力、教会、ジェスイット団、インディオやクレオールのコミュニティ、これらは大土地所有の形成に対立し抗争関係にあったそのかぎりでは把えられている。著者はまたメキシコと一口にいっても中央部および南部と北部とはまったく異なる環境をもち異なる発展過程をたどったものとして意識し、両者を対比させつつ論述している。

最後にかれはこの時代のメキシコを考察するにあたって中世ヨーロッパの社会制度との類似を認めながらも、次の点を見のがしてはならないと指摘している。すなわち新大陸におけるクレオールやメスティーソの文化は中世ヨーロッパの影響を受けながらも独自のものを発達させたこと。ヨーロッパに起源をもつものであっても新大陸の環境によって大きな変形を受けていること。また中央部および南部のメキシコには土着の文明が生き続けてきたこと。したがってそこにはいくつかのメキシコが併存する。すなわちクレオールやメスティーソのメキシコとインディオのメキシコであることなどである。

(調査研究部ラテン・アメリカ調査室 石井 章)